

新書『授業の腕をあげる法則』 向山洋一著

教師は「教育のプロ」である。

子どもを「教える育てる」ことを専門とする職業である。

だから当然「教える育てることのできる技術方法を持っている」ということが条件となる。

医師と比較してみるといいだろう。

私たちは、どんな医師を良いと思うだろうか。「明るく、優しく、公平であって、知性的である」医師は好ましいにちがいない。特に、人間と人間としてつきあう場合なら、これだけでいい。

しかし、私たちが患者として医師とつきあうとする。

「三日間、高熱が続いているのです」と言ったとき、医師が「それは、つらいでしょうね」という優しさを示してくれるだけで満足するだろうか。常識的な病気に「原因は分りませんが、治療方法も分りません。でも、とにかく一生懸命やってみます」という医師に命を預けるだろうか。

むしろ、その病気が難病であって、本当に治療方法が分らないのならしかたがない。

しかし、医師としての「技術・方法」からすれば「分るはずである、治療方法はある」という場合に、「よく分りませんがとにかくやってみます」という医師に命を預けることはない。

つまり、医師は「医療活動をする技術なり方法なりを持っている」ことにおいて専門職なのであり、「技術・方法」を駆使して、患者の病氣と闘ってくれるのである（この原稿を書いた直後、中堅医師の医療技術習得を義務づけるとの新聞記事が出た）。

教師も同じである。

教師も、「そういう場合はこのような方法があります」という「教育の技術なり方法なり」を持っている」ことにおいて、専門職なのである。

明治図書 1985

ところが、「技術なり方法なりを持たないで」「とにかくやってみます。一生懸命やってみます」と言っている教師がいる。情ないことに、そうした心構えがあれば教師として立派であると思ひ込んでいる風潮が一部にある。

どんな職業の人でも、その仕事の技術なり方法なりを持っている。

大工さんは家を建てる技術・方法を持っており、自動車学校の先生は、運転技術を身につけさせる技術なり方法なりを持っている。

なぜ、学校の教師だけが「とにかくやってみます」という程度のことと、許されるのか？なぜ教育の技術なり方法なりを持っていないで、子どもを教育するという大それたことをやっていられるのか？

私は不思議である。

授業開始のチャイムが鳴り終わった。

子どもたちの前に立った私は、一つの指示を与えた（なお、私は「起立、礼」というようなことはやらない。このような形式で授業を律するのが私は嫌いである。中には、研究授業の時、参観者に向けて「起立、礼」をさせている教師がいる。私は率直に言えば、このような行為を子どもにさせるのは反吐が出るほど嫌いである。それだけで、もうその教室から逃げ出したくなる。）

私は子どもたちの前に立って「全員起立」と静かに言ったのである。そして「プリントを読み終わったらすわりなさい」と続けた。

これだけである。これですべてである。

II 学校の生活

1 学校の1日

教師には様々な仕事があります。授業はもとより、校務分掌や行事の準備、けがの対応などの緊急対応もあります。何より、児童とともに過ごす時間を確保することが大切です。登校前や下校後の時間を活用して、少し工夫をすることで、限られた時間を有効に使うことができます。

ある小学校の例

8:30	登校指導
8:45	朝の会
	授業
10:20	中休み
10:40	授業
12:15	

児童にとって、登校したときに教師や友達と交わり始める挨拶が、その日の元気の源となります。子供たちの反応からは、その日の体調や気分、登校前の様子が見えてきます。

教室では、一人一人、顔を見ながら、名前を呼んで出席確認をします。随時観察を行い、必要に応じて随時始業や学年の教員に連絡します。連絡がないまま登校を認識できない児童がいた場合は、すぐに保護者へ連絡します。連絡が取れない場合は、速やかに管理職や学年の教員に報告し、情報を共有します。

中休み(20分)には、校庭で児童と一緒に遊ぶようにしましょう。時には、教室の窓から校庭の児童の様子を観察して、友人関係を確かめることも大切です。

学習指導の出発点は、児童の実態を知ることから始まります。学力や体力のほか、友人関係も把握しておくことが大切です。

年間指導計画を踏まえて作成した週ごとの指導計画に沿って授業を展開していきます。学習指導要領に基づき、児童自身に付けさせたい力を明確にした学習指導案を作成することが大切です。

学習指導

- 文部科学省が定めている学習指導要領を基準として、各学校では教育課程を編成しています。学習指導要領を常に身近に置き、様々な機会に内容を確認してください。
- どの教科のどの単元も、児童の実態をしっかりと把握することが大切です。そのためには、日頃から、児童の学力や体力の状況、人間関係、休み時間の過ごし方など、実態を把握するための資料を集めておくとういでしょう。
- 新しい単元に取り組む際は、関心・意欲を高めるための導入の工夫が必要です。多様な情報などから、最もよい材料を選んで導入の工夫に生かしましょう。
- 授業の「ねらい」を明らかにしましょう。児童がそのねらいを達成できたことを認識できなければ、「ねらい」が明らかな授業とはいえません。先輩教師の授業観察ができる機会には、その授業でどのように「ねらい」に迫ろうとしているかという視点から授業を観察すると参考になります。
- 授業の「ねらい」と学習の「めあて」が適合していることが大切です。そのためには、学習資料や学習カードなどが役立ちます。
- 1単位時間の学習の中で、場面合った言葉遣い、声の大きさ、身体の動きなど様々な工夫が必要です。そのような工夫により、児童の集中力が高まります。
- 学習内容と生活体験とが関連付けられると、児童の理解がぐんと深まります。
- 「どう教えればいいのか」と悩んだときは、児童を個別指導する中で、つまづきやすいポイントを明確にしなが、指導方法を改善していきましょう。
- 児童に学習による「達成感」を味わわせるためには、授業の中で思考し、発信する場面を、適切に設定することが必要です。

常に学び続け、自分を磨き、指導力を高め、子供たちの学力・体力を伸ばし、豊かな心を育てること。

12:15	給食指導
12:50	昼休み
13:05	(清掃指導)
13:20	授業
14:55	帰りの会
15:10	
16:45	放課後

食育の観点を踏まえた給食指導を行いましょう。教室で全体を見渡しながら食べることも大切ですが、生活班を回って、児童と一緒に食事をすると、その会話の中から、多くの情報を得ることができます。また、授業では見せない児童の様子から、友人関係の変化を知ることができます。

清掃指導では、児童と一緒に清掃をしながら、当番活動の役割と働くことの意義を理解させることが大切です。清掃の様子からも、児童の心気や友人関係を知ることができます。教室のゴミが落ちている、黒板に落書きがあるといったような状況を放置すると、学級経営が難しくなる可能性があります。また、教室・トイレ・廊下・特別教室・黒板・壁などの破壊箇所は、気が付いたらすぐに修繕します。

帰りの会では、一日を振り返り、明日の学習や生活の見通しをもたせるとともに、下校の際に気を付けることについて、一声掛けましょう。

児童が下校しても、校務分掌や学級事務、学年会等、様々な校務があります。優先順位を付けて、一つ一つ確実に実施していくことが大切です。分からないことは上司や同僚にアドバイスを求めましょう。

東京都の学校には、校長、副校長、主幹教諭、指導教諭、主任教諭、教諭といった職があり、それぞれに果たすべき職務があります。一人一人がその職務を果たすことで、組織的な学校運営が可能となります。



学校行事

<儀式的行事>

- 儀式的行事は、全校の児童及び教職員が一堂に会して行う教育活動であり、入学式、卒業式はもちろん、始業式、終業式のほか、朝会などが考えられます。児童にその場にふさわしい態度を身に付けさせる機会として重視しましょう。場にあふさわしい言動の在り方は、各発達段階でしっかり身に付けさせていきましょう。

<文化的行事、団結や全体的行事>

- 学芸会や展覧会、運動会などの行事は、児童一人一人に明確な「めあて」をもたせることが大切です。何のために取り組む行事であるかを、担任がしっかり示しましょう。
- 学芸会や運動会等の当日は、学習の成果を発表する場として大切です。しかし、そこに至るまでの工夫や努力など、行事に取り組む過程で児童は多くのことを学びます。それぞれの行事のねらいを達成できるよう指導していくことが大切です。



子供たちの「未来」をつくるのは「今」です。子供たちの「今」に、少しでもよい影響を与えることができたら、教師として本望だと思います。